

- 17 衛藤七弥太は内田手永惣庄屋。在任期間は慶応元(一八六五)年六月朔日〜慶応三(一八六七)年九月(『肥後讀史總覽』上巻、七四八頁)。
- 18 村上久太郎は在任期間から玉名郡郡代村上求太郎と推定される。在任期間は慶応元(一八六五)年四月二十四日〜明治一(一八六九)年一月二十八日(『熊本藩役職者一覽』、二七八頁)。
- 19 註14参照。
- 20 多田隈丈左衛門は南関手永惣庄屋。在任期間は元治元(一八六四)年七月十一日〜明治元(一八六八)年十一月十日(『肥後讀史總覽』上巻、七五二頁)。
- 21 註18参照。

長屋 佳歩(ながや かほ) 豊後大野市教育委員会文化財係主事  
安高 啓明(やすたか ひろあき) 熊本大学大学院人文社会科学部研究部准教授

一候程二相働、父九兵衛逸稜之助二相成儀茂有之、<sup>(マ)</sup>奇特之儀茂御座候間、良心被誘二茂相成可申候付、入墨被除下候而者何程二可有御座哉

但、近來間々一刀を帯候儀茂有之哉之処、ケ様之人物ニ全備候者難被責候間、右一条者御究候節辞令ニ取加、向後弥以相慎帯刀扱いたし心得違不仕様父分精々加教諭可申旨及達候而者如何程二可有御座候哉

安政六年八月廿七日西武彦前刑扣略ス

御用有之候間今日昼之内御一人御奉行所口之御間江可有御出有候、以上

九月十九日

小山多左衛門

坂本彦兵衛

中村敬太

田口弥左衛門様

田口角助様

団七左衛門様

返書也

長岡和泉殿

家司江

御家来西九兵衛侍

西武彦事

武彦

右者不届之儀有之、入墨答た、き眉無之御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候由付、此節入墨被除下候、此段可被及達候、以上、

九月十九日

尚々本文之通被 仰付候上、帯刀等いたし候而者心得違之事二付、弥以相

慎候様、可被及達候、以上

〔註〕

- 1 小山造酒喜は川尻船頭。在任期間は嘉永六（一八五三）年七月～明治二（一八六九）年四月（西山禎一『熊本藩役職者一覽』非売品、二〇〇七年（以下『熊本藩役職者一覽』）、二二五頁）。
- 2 三宅五郎左衛門は川尻船頭。在任期間は文久元（一八六二）年六月十三日～慶応二（一八六六）年六月十三日（右同）。
- 3 北里傳兵衛は北里手水惣庄屋。在任期間は嘉永六（一八五三）年十二月二十四日～明治三（一八六七）年七月五日（松本雅明監修『肥後讀史總覽』上巻、鶴屋百貨店、一八九三年（以下『肥後讀史總覽』上巻）、七七四頁）。
- 4 内山又助は小国・久住郡郡代。在任期間は元治元（一八六四）年十二月二十三日～慶応三（一八六七）年四月十七日（『熊本藩役職者一覽』、二九五頁）。
- 5 井口呈助は小国・久住郡郡代。在任期間は元治元（一八六四）年六月二十七日～慶応元（一八六五）年十一月二十四日（右同）。
- 6 衛藤七弥太は深川手水惣庄屋。在任期間は文久二（一八六二）年十一月十四日～慶応元（一八六五）年六月朔日（『肥後讀史總覽』上巻、七六一頁）。
- 7 村上久太郎は菊池郡郡代。在任期間は文久元（一八六二）年六月～慶応元（一八六五）年四月二十四日（『熊本藩役職者一覽』、二八四頁）。
- 8 熊谷市郎左衛門は菊池郡郡代。在任期間は慶応元（一八六五）年四月二十四日～慶応二（一八六六）年五月四日（右同）。
- 9 小山七郎太は松山手水惣庄屋。在任期間は文久三（一八六三）年二月朔日～明治三（一八七〇）年七月五日（『肥後讀史總覽』上巻、七三二頁）。
- 10 入江次郎太郎は宇土郡郡代。在任期間は万延元（一八六〇）年十二月～慶応四（一八六八）年一月（『熊本藩役職者一覽』、二六七頁）。
- 11 註1参照。
- 12 註2参照。
- 13 福嶋太郎右衛門は在任期間から福嶋太郎助知次と推定される。在任期間は、元治元（一八六四）年六月二十一日～明治三（一八七〇）年七月五日（『肥後讀史總覽』上巻、七二八頁）。
- 14 入江次郎太郎は下益城郡郡代。在任期間は万延元（一八六〇）年十二月～慶応四（一八六八）年一月（『熊本藩役職者一覽』、二六四頁）。
- 15 古閑忠右衛門は本庄手水惣庄屋。在任期間は文久元（一八六二）年七月～明治三（一八七〇）年七月五日（『肥後讀史總覽』上巻、七一四頁）。
- 16 中村庄右衛門は飽田託摩郡郡代。在任期間は慶応元（一八六五）年四月二十四日～慶応四（一八六八）年一月二十五日（『熊本藩役職者一覽』、二五八頁）。

候様被 仰付置、当月まで二全く五ヶ年二相成申候間、此段御達仕候、以上

慶応三年八月

西九兵衛

和泉方家来西九兵衛倅武彦儀二付而、別紙之通達出申候間、宜敷被成御執達可被下候、以上

八月十二日

田口弥左衛門

田口角助

団七左衛門

小山多左衛門様

坂本彦兵衛様

中村敬太様

覚

長岡和泉殿家来

西九兵衛倅西武彦事

武彦

歳三十位

右者先年不届之儀有之、御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候哉、当時之様子共如何程二有之候哉之旨二付承繕申候処、武彦儀者不届之儀有之、安政六年頃入墨百答三年眉無之御刑法被 仰付、文久二年八月頃右年限相濟、父九兵衛江御引渡二相成候由、然二同人儀其砌者歩御小姓組脇相勤候由之處、武彦右之通重御咎被 仰付候様成行候儀者、畢竟兼而之教諭忽二有之候処分右之埒二至候咎二よつて役儀御差除二相成、同人儀も下屋敷内居住いたさせ候儀、心痛之稜茂有之、幸其頃五町手永宇留毛村天満宮社守無之候由二而、九兵衛儀手寄を以同所江一家内引越内分致居住居候由、然処武彦儀者生得之儒生にて御咎以前与申而茂、文武之稽古差入相励候様之

事者絶而無之、右之通御返二相成候後者猶更にて謹慎之稜目茂薄相見候處、同人儀者強勢成もの之上取馬扱二一三等者好之道二能心得居候由二付、近村二懸農家之加勢二参居候内二者、多駄荷運送等之仕事等二仕居たる由二候得共、向々二而格別為合二茂不相成坎、一ヶ月又者二ヶ月位二而所替いたし、何方江茂永統不致候得共、宿元壺反余之内作者手一程二而相働、當時逸廉手助二相成候由、然処当春頃之事之由、武彦儀如何之存念にて為有候哉、彼近辺在御家人之所江参、剃刀を借自髪を剃落、当時髪者撫付居、其節之儀狂気体之致方二而茂可有之相見、近来者刀を拵村方抔出歩行候節、潜二一刀帶罷越候由、右之通二而、武彦儀御返二相成候後當時共慎方付格別稜目を挙候程之儀者聞兼候得共、先相慎居候方二有之候由、尤村内出歩行候節抔潜二一刀帶罷越候儀者、心得違成事之由唱承申候、以上

卯九月日

森十兵衛

藤井太左衛門

伊佐大七

桜田弥次右衛門

山口純太郎

松原彦弥太

武田和平

城素兵衛

河口弾治

荒木嘉兵衛

御目附衆中

僉議 平川

本紙武彦儀、馬を盜候付苗字大小御取上入墨答百徒三年之刑被 仰付置候処、刑後五ヶ年を過候付、最早入墨被除下哉と聞方被 仰付候処、稜目を挙候程二者無之候得共、先ハ相慎居候由、尤内作者手

権左衛門育之  
叔父山本次郎太事

次郎太

歳四十程

右者先年不屈之儀有之、重御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候次第、当时之様子共如何程ニ有之哉之旨に付承繕申候処、同人儀不屈之儀有之、安政六年九月頃苗字大小御取上入墨答百た、き三年眉無之御刑法被 仰付置候処、年限相済文久二年九月頃右権左衛門江被引渡候由、然処次郎太儀仕覚候産業之道茂無之頓斗権左衛門厄介者ニ罷成居候由にて、其儀心外ニも存申たる哉、一昨年春之頃今大津方え罷越、質屋杯江加勢いたし、兎哉角与押移居候処、昨年夏之頃今坎右同人所江引取、其後茂有折者罷越候由ニ候得とも、今日之助成ニ相成候程之儀茂無之由、尤次郎太儀右之通重御答後慎方ニ付而、稜目を拳候程之儀者聞兼候得共、以前与違悪敷振舞等者いたし不申前非を悔、先相慎居候由唱承申候、以上

卯三月

金子軍助

千場市之允

山口純太郎

松原彦弥太

城素兵衛

河口弾治

上垣七作

御目附衆中

本紙次郎太儀、大津江罷越居候内、彼方ニ而妻帶いたし昨年頃子茂出生いたし候由之処、如何之訳より坎妻者離縁いたし、右之子を連帰権左衛門所江同居いたし居候由承申候段演舌

外様足輕山本権左衛門  
育叔父山本次郎太事

次郎太

〔付札〕

僉議 廣田

有 溝 小田 郡笠 尾三 〇鎌田 井上 柏木 木村 御目附

右者前刑別紙書抜之通ニ而、徒限相済被差返候後、当年迄ニ而六ヶ年ニ相成候處、其後格別稜目を拳候程之聞者無御座候得共、御答後前前を悔、以前与違ひ相慎居候儀者相違無之趣、委細御横目聞方之通ニ付、最早年数茂相立不良之心根取置居候付而者、自新之道も被誘候ため、願之通追々之御見合を以入墨可被除下哉  
但、人命ニ係り候而、或者死罪被宥置、且毆傷ニよつて残疾不具ニ成候者之外、刑後五ヶ年過候得者除墨被差免候御見合ニ御座候事  
一 安政六年十一月十日山本次郎太前刑扣略ス

貴殿組外様足輕山本  
権左衛門育之叔父山本  
次郎太事

次郎太

右者不屈之儀有之、入墨答た、き眉無之御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候由ニ付、此節入墨被除下候、此段可有御達候、以上

四月十九日

梶原小四郎殿

御刑法方  
御奉行中

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違等之儀有之候而者難相済事ニ付、弥以相慎候様可有御達候、以上

□ 口上之覚

私倅武彦儀、不屈之儀有之御刑法被仰付、文久二年八月私江御引渡相成御達之趣、於私茂奉恐入重疊加教諭相慎居申候、従夫五ヶ年過候ハ、御達仕

〔付札〕  
代 有 小 田 左 笠 溝 尾 三 鎌 田 井 上 柏 木 木 村 御 目 附

御目附衆中

僉議 草野

本紙伊右衛門前刑別紙之通ニ而、ぬ之字入墨答百徒三年之刑被 仰付、文久元年年限相濟被差返候処、入墨被除下候様願出候付、御横目聞方及達候処、其後前非を悔相慎候段、本紙之通ニ御座候、徒刑御免後最早六ヶ年ニ相成申候間、追々之御見合を以伊右衛門儀除墨被 仰付、向後慎方之儀例之通及達可申候哉

安藤佐一兵衛

城素兵衛

河口彈治

上垣七作

河嶋嘉右衛門

大塚権三郎

小原権内

□ 口上之覚

私組山本権左衛門育之叔父次郎太事ニ付、組役共々別紙之通願出申候間、願之通被 仰付被下候様於私茂奉願候、則別紙相添相達申候間、此段可然様被及御參談可被下候、以上

十一月十二日

梶原小四郎

御刑法方

御奉行衆中

奉願口上之覚

山本権左衛門育之叔父

次郎太

前刑控略ス

元御勘定頭支配

吉田伊右衛門事当時

御支配吉田熊兵衛

支配

伊右衛門

同 牛嶋健太郎

横目

田添壽平

右者不屈之儀有之、先年入墨答た、き眉無之御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候由ニ付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

二月廿六日

御刑法方

御奉行中

須佐美九郎兵衛殿

覚

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違等之儀有之候而者難相濟事ニ付、弥以相慎候様、可有御達候、以上

梶原小四郎組 外様足輕山本

□

私支配ニ而吉田熊兵衛支配伊右衛門儀不屈之儀ニ付、三年眉無之御刑法被  
仰付置候処、年限相濟右熊兵衛ニ御引渡相成御教諭之趣堅相守、以来屹心  
底相改候ハ、五ヶ年過委細書付を以相達候様御達ニ相成居候通ニ御座候  
処、其後弥以慎方宜候付、別紙之通願出申候間、御憐愍之筋を以何卒願之  
通御印拔取被 仰被下候様、此段御達仕候、以上

十二月三日

須佐美九郎兵衛

御刑法方

御奉行衆中

奉願上口上之覚

元御勘定所支配吉田

伊右衛門事当時私支配

伊右衛門

右者先年不屈之儀有之、三年眉無之御刑法被 仰付、定御小屋江下ヶ被置  
候処御年限相濟、文久元酉十一月被差返、其後弥以慎方宜御座候、然処最  
早御免後六ヶ年二茂相成候間、奉願上候儀重畳恐多奉存候へとも、何卒御  
慈悲之筋を被為持御印御拔取被仰付被下候様奉願上度願之通被 仰付被下  
候ハ、於私茂重畳難有仕合奉存上候、此段可然様被為成御達可被下宜奉  
願上候、以上

十一月

吉田熊兵衛

覚

元御勘定頭支配吉田  
伊右衛門事当時須佐美  
九郎兵衛支配吉田熊兵衛  
支配

伊右衛門  
歳四十六程

右者先年不屈之儀有之、重御刑法被 仰付置候処、其後相慎候哉、当時之  
様子共如何様ニ有之候哉之旨ニ付承繕申候処、同人儀御銀支配役ニ而江戸  
江相詰居候内心得違之儀有之、安政五年十一月眉無之御刑法被 仰付、文  
久元年十一月年限相濟縁類右熊兵衛江御引渡ニ相成、直ニ同人支配ニ罷成  
候由、然ニ伊右衛門妻者金左衛門殿御家来南門兵衛と申者之娘ニ而、右之  
通之不仕合ニ逢故郷方右同人所江引取居候付、伊右衛門儀茂門兵衛江振懸  
慕候故、同人世話ニ而於水道丁主人屋敷之家居ニ住居仕、覚居候きせる筒  
杯致細工傍ニ者知音之向々鳥目借受錢貸杯いたし夫婦相暮居候処、手稼等  
ニ而者往々渡世之見通茂付兼候付而者、弥以心得違いたし候之事を及後悔  
候処、世話いたし候者有之、同三年二月比々貴田権内方江加勢ニ罷越、家  
事之世話向被相頼候付、諸事受込便利ニ相成候様心を用候間、苗字大小差  
免一季ニ被抱、右之次第者筋々ニ相届候由ニ而者時分々伊右衛門帯刀いた  
し候由、然処権内方縁家有吉清助方者筆算相叶候者吟味ニ相成候処、可然  
者無之依而右伊右衛門儀所望被致候状ニ而、権内方一季ニ被抱置候俣被相  
讓候付、去十二月比引渡候得共、表向者今以同人方抱ニ而現実者前文之通  
ニ有之候由、清助方ニ而者伊右衛門江人仕被申付、日々下方之役割を差図  
いたし、且又台所向日用之小買物受持受払いたし候由之処、不正之筋等無  
之、勤筋茂相応に相捌候由、右之通ニ而伊右衛門儀慎方ニ付殊勝之稜目者  
聞兼候得とも、一体謹慎罷在候由唱承候、以上

寅十二月日

金子軍之助  
千場市之允  
内海八兵衛  
松原彦弥太  
山田五次兵衛

右者先年不屈之儀有之、御刑法被 仰付置候処、其後相慎居候哉、當時之様子共如何程ニ有之候哉之旨ニ付承繕申候処、同人儀者先年江戸御銀支配役として被差越置候節不埒之儀有之、安政五年十一月頃右之手ニ入墨筈百た、き三年眉無之御刑法被 仰付、文久元年十一月頃年限相済被差返、右角太郎江御引渡ニ相成候由之処、宮川工馬之助方江者以前分出入茂いたし居、其知音今直ニ同人方江加勢ニ罷越候処、万端世話筋行届候由ニ付、小買物等之受払被相頼候処、私儀ケ様ニ重御咎被 仰付候儀者、偏ニ金故之事ニ付金錢者私欺と相心得居候間、此儀者何卒外人江御申付被下候様、一且者改而相断候得共、筆算等相応ニいたし、外ニ可然手人茂無之由ニ而、強而被及相談候ニ付、其後者右受払等重ニいたし候之由之処、聊間違等無之自然小者杯買物相遣等有之候節者、御印を見せ自分首之緒者此御印ニ有之杯与重疊心を付相誘候付、外ニ傍輩之者江茂心得方宜敷相成候儀茂有之候由ニ而、一体為合ニ罷成候処分翌十一月頃依願苗字大小差免一季ニ被抱候由、扱三郎次妻者御昇組久布国文之允と申者之姉ニ而、右之通之不仕合ニ相成候後者、故郷方江引取居候処、其砌工馬之助方江者八代御番頭被仰付下女杯手足不申付、右妻を茂御呼取置所用向等被申付候処、諸事心を用相稼候由ニ而、工馬之助方八代江被引越候節茂夫婦共被連越、其後者三郎次儀内輪家司役代物書之場を茂被申付、武器類之手入を初家事大小与なく相任被置候処、弥以万事正路ニ相勤候由ニ而、いつれ之衆茂不怪氣ニ協被居候由ニ而、當時夫婦之者共宮川家逸廉之便利ニ相成居候由、右之通ニて三郎次儀御咎被免候後、当年迄七ヶ年之間深前非を悔、主用大切ニ相心得重疊相慎居候儀者殊勝成事之由唱承申候、以上

卯正月日

金子軍助

千場市之允

内海八兵衛

松原彦弥太

御目附衆中

〔付札〕 僉議 平川

山口五次兵衛  
城素兵衛  
河口彈治  
上垣七作  
大塚権三郎  
小原権内

本紙三郎次儀、詐欺之手段を以受込之御銀を余計遣込候付、安政五年十一月ぬ字刺墨筈百徒三年之刑被 仰付候処、其後相慎居候由ニ而、除墨願出候付御目附付御横目聞方被 仰付候処、慎方相違無之、當時宮川工馬之助一季抱ニ相成、主家世話筋行届、金錢受払等手堅有之候内ニ而、殊勝之稜目茂相見候趣、委細本行之通ニ而、徒刑分被差返候後茂最早七ヶ年ニ相成申候付、追々之見合を以入墨被除下、向後弥以相慎候様及達可申哉

代有 小 郡 尾 溝 田 井上 柏木 木村 御目附

御勘定所物書  
井上角太郎支配  
井上三郎次事

右者不屈之儀有之先年〔見せ消ち〕ぬ字入墨筈た、き眉無之御刑法被 仰付置候処、其後相慎心得方殊勝ニ有之様子ニ相聞候付、此節右入墨被除下候、此段被有御達候

二月廿六日

御刑法方  
御奉行中

御勘定頭衆中

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者、難相済事に付、弥以相慎候様可有御達候、以上

村上久太郎21殿22

御刑法方

御奉行衆中

〔付札〕 僉議 廣田

南関手永宮尾村

関右衛門

米小  
郡有  
左  
尾木  
井上  
柏木  
木村  
御目附

此関右衛門儀、小代御山之立木盗伐いたし安政四年閏五月ぬノ字入墨四十笞之刑被處置候処、其後相慎農業出精いたし、御年貢諸公役筋太切ニ相心得候趣委細御郡御目附付聞方之通ニ而、弥以改心いたし候者と相見申候、右之通之者刑後五ヶ年過候得者除墨之御取扱追々其御見合有之候処、関右衛門儀者最早十ヶ年ニも及候付、右入墨被除下、弥以相慎候様及達可申哉

南関手永宮尾村

関右衛門

右者不埒之儀有之、先年入墨笞た、き之御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

十月廿四日

御刑法方

御奉行中

村上久太郎殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事ニ付、弥以農業出精いたし候様可有御達候、以上

□ 御内意之覚

私支配井上三郎次事

三郎次

(一六)

右者不埒之儀有之、安政五年午十二月御刑法被 仰付苗字大小御取揚ぬノ字入墨三年眉無之御法被 仰付、文久元年酉十一月年限相濟被差返候ニ付、直ニ宮川工馬之助方江加勢ニ参り居候処、同二年戌十一月苗字大小被指免一季抱召仕ニ相成、今以謹慎を加手全ニ相勤居申候付、何卒右御印御被被下候様、私ノ重畳奉願候、此段宜被成御達可被下候、以上

十二月

井口角太郎

口上之覚

当時御勘定所物書  
井上角太郎育之兄  
にて先年御咎被  
仰付候

井上三郎次

歳四十六程

右者先年不埒之儀有、御刑法被 仰付徒刑小屋江被閣、文久元年酉十一月年限相濟御返ニ相成、同二年十一月依伺一季抱にて苗字大小差免、抱方不苦段御達ニ付、直ニ私召抱置候、家事儀大小与なく相任せ置候處、万端相働下方ニ至迄心を用、諸事弁利ニ相成、是迄謹慎を加罷在候間、乍恐御印取方御免被 仰付被下候様於私奉願候、此段ニ就被成御参談可被下奉願候、以上

十二月

宮川工馬之助

覚

御勘定所物書井上  
角太郎支配井上  
三郎次事

三郎次

歳四十六程

年貢諸公役等速ニ相勤、村方之交熟ニいたし候由、御郡御横目聞方委細別紙之通ニ而、御咎後最早二十ヶ年ニ相成申候

右之通ニ付五ヶ年過候得者除墨之御取扱ニ相成候儀、追々之見合御座候間、兩人共入墨被除下、向後弥以相慎居候様及達可申哉

廻江手永木原村

七左衛門

右者不届之儀有之、先年入墨咎た、き之御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

八月廿五日

御刑法方

御奉行中

入江次郎太郎殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事ニ付、弥以農業出精いたし候様可有御達候、以上

内田手永竈門村

善作

八月廿五日

右同文章ニ付扣略ス

□ 覚

南関手永宮尾村

関右衛門

右者先年御刑法被

仰付置候處、其後相慎居候哉之旨ニ付承繕申候處、右被

斗余受持農業出精いたし、御年貢諸公役等太切相心得、且父代今馬口労働免被 仰付置関右衛門儀茂引統農業之傍ニ馬口労働いたし牛馬売替等正路ニ

取計候付、所柄一稜弁利為合相成候由、右之通ニ而、御刑法被被

仰付候後数年之間深相慎、農業出精いたし御年貢諸公役等太切相心得、馬

口旁正路取計候次第近辺称誉いたし居候由承申候、以上

寅九月

吉武英右衛門

〔行間朱書〕

〔下付紙〕

本行関右衛門儀前刑吟味仕候處、書面之通相違無御座候事

御刑法方

乍恐奉願覚

南関手永宮尾村

関右衛門

当寅四十歳

右関右衛門儀、同村為助と申者申合、小代御山内之立木盗伐いたし、御山口分被見咎候末、猶又盗伐いたし候次第不届者共ニ付、去ル安政四閏五月ぬ字入墨咎四十た、き完之御刑法被仰付候者共ニ而、其節精々御教諭被仰付置、御教諭之趣堅相守、以来屹卜心底相改候ハ、五ヶ年過委細書付を以御達可申上旨被仰付置候通ニ御座候、然處右関右衛門儀、右之次第重畳後悔之体ニ而深ク奉恐入、其後屹卜心底相改万端相慎御教諭書御法度筋稜書之趣等能相守、御年貢諸公役等も入念相勤農業出精仕居、最早右御咎後当年迄九ヶ年ニ相成申候、依之乍恐除墨御免被仰付被下候様於私も奉願候、尤同様被仰付置候、為助儀者其後も心得違之儀有之御難題ニ罷成候者ニ而除墨等奉願候埒之者ニ無御座、関右衛門儀者前文之通弥以改心仕居候者ニ御座候間、宜ク被仰付可被下候、此段書付を以奉願候、以上

慶応二年七月

宮尾村庄屋

長左衛門④

右之通願出申候ニ付、内輪精々承繕申候處、関右衛門儀右書面之通改心仕、万端相慎居、最早御咎後九ヶ年ニ相成委細書面之通相違無御座候間、何卒除墨御免被仰付被下候様於私茂奉願候間、宜被仰付可被下候、此段肩書を以申上候、以上④

多田隈丈左衛門<sup>20</sup>殿④

〔冒頭行間朱書〕

当寅三十八歳

「本紙七左衛門儀見聞仕候處、御咎被 仰付候後、万端謹身ニ罷在心底を改農  
業一篇ニ打懸り居、何ぞ相違之儀も無御座候、此段見聞之趣乍恐付紙を以御  
達申上候、以上

寅四月

藤井淳之助

〔本文中行間朱書〕

「本行七左衛門前刑吟味仕候處、書面之通相違無御座候事

御刑法方

覚

底相改農業一偏ニ打懸り、当時出作地高共五石余受持居、御年貢諸  
公役等速ニ相勤、村方之交等熟ニいたし候由ニ而、右御咎被 仰付  
候以来、当年迄二十ヶ年重疊謹慎仕居候由承申候、以上

寅七月

河口源右衛門

〔付札〕

代有

小溝

木田

老三

荒木

柏木

道家

木村

御目附

右者木原村御山口在勤中、預御山之倒木会所用ニ剪出之節、同手永  
榎津村木挽清四郎江申談、私ニ倒木外之立木伐方致せ、清四郎江茂  
盗伐差免候次第、役前致忘却別而不届者ニ付、去ル万延二年二月六

日御山口被 差放ぬノ字入墨答六十た、き之御刑法被仰付、私ニ入  
墨を除候而者重科之事ニ付、稠敷申付候様、尤教諭之趣堅相守、屹

ト心底相改候ハ、五ヶ年を過委敷書付を以御達可申上旨、其御御達  
之通ニ御座候、然處右七左衛門儀、万延二年二月御刑法被 仰付、

当寅二月迄真年五ヶ年ニ相成申候処、其後屹ト心底相改農業相励、  
万端謹慎仕申候間、乍恐入墨被拔下候様奉願候、此段覚書を以申上

候、以上

慶応二年三月

石坂禎之助

入江次郎太郎

覚

内田手永電門村

善作

右者先年不届之儀有之、御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候哉之  
旨ニ付承繕申候處、御刑法被 仰付ニ付而者先非を悔、深奉恐入心

(一四)

廻江手永東木原村

七左衛門  
歳三十八程

右者不届之儀有之、先年御刑法被 仰付置候處、其後相慎候哉之旨  
ニ付承繕申候處、七左衛門儀万延二年酉二月御刑法被 仰付、最早  
六ヶ年程ニ罷成候由、其後兩親姉舅共同居いたし、農業相励高地三  
拾石程作廻いたし相応ニ相暮居、村寄酒席杯ニ茂遠慮いたし、前非  
を悔深奉恐入謹慎いたし居候由承申候、以上

寅七月

宗村弥久馬

僉議 平川

廻江手永木原村

七左衛門

右者木挽職之者ニ御山之立木盗伐差免候付、文久元年二月ぬノ字入  
墨六十答之刑被 仰付置候處、其後相慎農業相励、村方酒席杯江茂  
遠慮いたし候由、御郡御横目聞方委細別紙之通ニ而御咎後最早六ヶ  
年ニ相成申候

内田手永電門村

善作

右者人を打擲いたし候疵ニ依而、其もの手ノ指不叶ニ相成候付、弘化四年  
四月入墨答六十徒壹年之刑被 仰付置候處、其後相慎農業一偏ニ打懸、御

〔付札〕

有米 小  
平 郡  
吉 鎌田  
柏木 道家  
佐久間 御目附

相慎居候付、入墨 被除下候様願之儀別紙之通に付、御目附付御横目聞方被仰付候處、慎方相違も無之職業農務等相励一体心得方宜、所柄弁利に茂相成候様子委細書面之通二而、御答後最早九ヶ年二相成候間、追々之見合を以入墨被除下、向後弥以相慎候様及達可申哉  
安藤門太事門太前刑 居物斬安藤熊五郎育之弟  
嘉永七年三月十二日 安藤門太

其元育之弟門太儀、先年不届之儀有之、額二入墨答た、き眉無之御刑法被仰付置候処、其後相慎職業等相励所柄弁利に茂相成候様子相聞候付、此節右入墨被除下候、此段可被申聞旨候、以上

正月

安藤熊五郎殿

尚々本文之通被 仰付候上ハ、猶又心得違之儀等有之候而者難相濟事二付、弥以職業出精いたし候様可被申付巨候、以上

御刑法方

□ 覚

内田手永竈門村

善作

右之者儀、先年不埒之儀有之候二付、入墨答六十た、き壹年眉無之御刑法被仰付、定御小屋江被留置年限相濟候二付、去ル弘化五年四月同村弟直右衛門江御引渡被 仰付置候二付、年々会所江呼出心得方等之儀教諭仕、御達申上来候通二御座候處、最早当年迄十九ヶ年改心仕、家内一和二申談農業出精仕候段、別紙同村庄屋宮川安左衛門分願出候書面之通相違無御座段相聞申候間、乍恐何卒入墨除被下候様奉願候、如願被仰付被下候ハ、弥以謹慎仕農業出精可仕候様教諭を加可申候間、重畳宜敷被仰付可被下候、此段添書を以申上候、以上

慶応二年四月

衛藤七弥太<sup>17</sup> ㊦

村上久太郎<sup>18</sup>殿 ㊦

御刑法方

御奉行衆中

奉願覚

一、男老入歳五十五

〔冒頭行間朱書〕

〔本行善作前刑吟味仕候處、書面之通相違無御座候事

御刑法方〕

内田手永竈門村

善作

右善作儀、去ル弘化五年四月地方境目之儀二付、居村富助与申者与及争論、手并荷棒を以同人を不法に打擲いたし疵を負せ右疵二よつて同人手之指不叶二成候次第重畳不届者二付、入墨答六十た、き一年眉無之御刑法被仰付、年限相濟候二付、弟直右衛門与申者江御引渡村人数二被差加、以来屹卜相慎候様親類者勿論村役人共分茂心を付候様被仰付置、最早当年迄十九ヶ年二罷成、年々御教諭被仰渡候趣堅相守、家内一和仕、其後者農業一遍二出精いたし、御年貢諸上納等茂速二相納、兼而謹慎之色相頭申候間、何卒御仁恵之筋を以、入墨御除ケ被仰付被下候様奉願候、如願被仰付被下候ハ、御仁恵之程奉感戴、弥増精農可仕と奉存候間、重畳宜敷被仰付可被下候、此段覚書を以奉願候、以上

慶応二年四月

竈門村庄屋

衛藤七太殿

宮川安左衛門 ㊦

村上久太郎殿

覚

廻江手永木原村

七左衛門

本所新坪井米屋町二而  
当時本庄手永大江村人数  
宗次郎

右者先年不屈之儀有之、御刑法之上熊本八代

御城下御構被 仰付置候処、御咎後多年相慎候付、入墨被除下、右御構被

成御免、新坪井米屋町人数被差返候条難有奉存、弥以相慎候之居様可有御  
達候、以上

十二月九日

中村庄右衛門殿

御刑法方  
御奉行中

本所新坪井米屋町人数二而  
当時本庄手永大江村人数  
宗次郎

右者先年不屈之儀有之、以下同文章二而新坪井米屋町人数二被差返候段、  
今日及達候条、右様御心得人数入之儀御達之事

十二月九日

町方

□ 奉願口上之覚

安藤熊五郎育之弟

門太

右門太儀、先年不埒之筋有之候付、御咎被仰付額二入墨被 仰付奉恐入  
候、然處門太儀其後大工職業いたし、心懸厚ク被雇入多御座候間、日々心  
能罷暮、兄弟睦ク誠心謹慎仕候段見聞仕候間、依之奉願候儀ハ恐入奉存候  
へ共、徒刑御免被 仰付候後当年迄八ヶ年二罷成申候間、何卒入墨被取被  
仰付被下候様於私共奉願候、願之通被 仰付候ハ、其身ハ不及申何と茂  
難有仕合ニ奉存候間、此段宜敷様被成御達可被下候、以上

十一月

美濃部直八

(一一)

太田喜十郎

小嶋龜太郎

林田次郎

後藤岩右衛門

村山算次

覚

居物斬安藤熊五郎育之弟

門太

歳三十九才

右者先年不屈之儀有之、御刑法被仰付置候処其後相慎居候哉、当時之様子  
共如何程二有之候哉之旨ニ付承繕申候処、門太儀士席之衆江対不屈之儀有  
之、安政元年三月比苗字大小御取上額入墨答百た、き三年眉無之御刑法被  
仰付、右年限相済同四年二月比兄熊五郎江御引渡ニ相成候由、然二同人儀  
ハ沼山津手永惣領村江居住いたし、直ニ宿許江連帰候へ共、差寄兄暮方之  
助成ニ相成候様之事茂出来兼候付、同手永福富村大工源十と申者之弟子ニ  
相成、心懸我慢出居候由之処、熊五郎儀難渋いたし候へハ永日雇も心痛い  
たし候由二而、文久元年比今同手永古閑村ニ別宅大工片手ニ少々内作をい  
たし渡世方一偏ニ打懸、小前同前ニ相心得慎方宜敷、村内家居之小繕位者  
受持程ニて所柄殊之外弁利ニ相成、内作之方も手馴不申事ニ候へ共、暑寒  
之厭なく肥手入等無間被相働、小前之者茂近を置候程二有之候由、右之通  
ニ而門太儀眉無御免後最早九ヶ年ニ相成候処、深前非を悔相慎居候由唱承  
申候、以上

丑十二月日

山田五次兵衛

御目附衆中

僉儀 分司平川駿太執筆

本紙居物斬安藤熊五郎育之弟門太儀、不屈之儀有之別紙書拔之通苗  
字大小御取上額二入墨百答三年眉無之御刑法被 仰付置候処、其後

由二而、親類縁家共茂何卒本所之人数ニ立帰せ安心仕申度近来類ニ相歎申候二付而者、最早無余命老体双方之情愍歎ケ間敷無余儀様子ニ奉存候間、是迄之次第村方二而之様子追々右改心之趣者及承居候得共、猶精々承合申候處、謹慎之次第等聊相違之儀無御座候、依之奉願候段者重畳恐多奉存候得とも何卒此節本所当町人数ニ御引戻被 仰付被下候様重畳奉願候、左候得者其身者不及申上、親類縁家共如何程狀難有仕合可奉存上私共ニおゐて茂重畳難有奉存候間、何卒御別段之御慈悲御憐愍を被為持、願之通被 仰付被下候様幾重ニ茂宜敷奉願候、尤当時支配方本庄手永大江村ニおゐて茂、右帰参二付而聊故障之筋無御座候二付、此段乍恐私共引取奉願候間、可然様被成御達可被下候、以上

慶応元年七月

新坪井米屋町  
丁頭

園田武右衛門

同  
五兵衛

吉村源次郎殿

清藤源八殿

水田武七郎殿

釘沢三十郎殿

美作英次殿

清藤彦右衛門殿

吉田鳩太郎殿

河口嘉久次殿

別紙之趣ニ付承繕申候処、新坪井米屋町人数ニ而為有之海老屋惣次郎と申者不届之儀有之、弘化二年七月御刑法被 仰付、熊本八代御城下御構被 仰付、当時本庄手永大江村人数ニ被差加置、漸露命を続居手紙使等之稼を

以取統、最早当年迄二十年程ニ相成、同人儀当年六十一歳程ニ罷成、御咎後者重畳恐入謹慎第一ニ相心得居、是迄村方ニ而茂何之申分茂無之、屹度改心之際相見居候由ニ付、市在ノ願出之通本所米屋町人数ニ御引戻被 仰付候ハ、弥以謹慎を加可申、且別紙相添置候通、縁家之者共茂有之何れ茂安心いたし可申よし承申候、以上

〔付札〕

丑十一月

町方御横目共

僉議 水津

此前廉新坪井米屋町人数宗次郎前罪別紙書拔之通弘化二年七月闕所

答刑之上

御城下御構被 仰付置候処、本庄手永大江村人数ニ加り当年迄二十

一年相慎候間、帰参被成御免、元之町人数被差返被下候様本紙之通

願出、慎方相違無之由、町方御横目聞方も達有之、追放之者五ヶ年

已上慎方次第本籍ニ被復候儀ハ、追々見合有之宗次郎儀御咎以来忒

拾ヶ年余相成候付、此節入墨被除下御構被成御免、米屋町人数ニ可

被差返哉

例

天保十四年二月廿四日

大津手永中窪内村  
善助列四人

同十一年五月十六日

日奈久御茶屋番ニ而致病死候田浦熊之助支配  
理兵衛

嘉永二年五月廿日

九郎右衛門殿家米大森三右衛門支配岡田力五郎事  
力五郎

同日

筑紫弥左衛門組西長蔵育  
己太郎

米 有 小 吉 鎌田 柏木 道家 佐久間 御目附

次郎兵衛  
長平

右者不屈之儀有之、先年入墨答百た、き之御刑法被 仰付置候処、其後相  
慎居候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

十二月三日

御刑法方  
御奉行中

入江次郎太郎殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而ハ難相濟事二付、弥  
以産業出精いたし候様可有御教諭候、以上

□ 乍恐奉願覚

新坪井米屋町人数二而当時本庄手永大江村人数二被差加置候、私儀不埒之  
儀有之、去ル弘化二年巳七月御刑法被仰付、熊本八代御城下御構被仰付候  
ニも落着向々におゐて支配方を究御達可申上旨被仰付置、本庄手永大江村  
ニ被引渡候処、山鹿町江知人有之落着申度奉願候二付、願之通被仰付候  
内、病気差起暫狂気之体ニ罷成、猶又横手手永古町村江落着申度奉願候  
處、相整兼候儀有之、住所茂相定兼居候内、病気茂平癒仕最初落着向大江  
村人数二相加度段奉願候處願之通被仰付、翌弘化三年正月大江村人数二  
被差加影踏等仕、生得商売を以渡世押移候者ニ御座候得者、差寄農業之働  
者出来兼、所方江之状仕イ或者日雇稼等を以免哉角与押移居申候処、当年  
迄二十一ヶ年ニ相成、私儀当年六十一歳ニ罷成老衰仕、最早余命少ク御座  
候處、生所米屋町江者親類縁者有之、且者先祖以來持伝候家名茂私ニ到  
り絶果候而、第一先祖ニ対難相濟、当時之為体ニ而者追孝茂届兼、誠ニ以  
歎ケカ敷次第二而今更後悔仕、是非一度者存命ニ而罷在候内本所之人数ニ  
立帰、先祖以來之家名茂起申度、兼而念願茂有之、御答被 仰付候後者屹  
度改心仕居候儀ニ而奉願候儀者重畳恐多奉存候得共、御憐愍被為以何卒今

度帰參御免被仰付、生所新坪井米屋町人数二被召加被下候様奉願候、此段  
乍恐覚書を以奉願候、以上

慶応元年七月

根元新坪井米屋町人数二而  
本庄手永大江村人数二被差加候

宗次郎<sup>⑩</sup>

右之通願出宗次郎儀、御答被仰付候後者、屹度改心仕心得方も宜  
敷、生所米屋町江者親類縁者茂有之候処、最早老衰仕余命茂少ク  
者ニ而、存命之内一度者生所之人数ニ立戻、先祖以來之家名茂起  
申度存念之趣無余儀情愍ニ相見申候間、何卒宗次郎願之通帰參御  
免被仰付被下候様於私共茂奉願候、此段肩書を以申上候、以上

大江村庄屋

喜三次殿<sup>⑩</sup>

同村右後見

今村安右衛門殿<sup>⑩</sup>

右之通相達申候間、内輪之様子相糺申候処、改心仕候次第書面之通相  
違無御座、最早老衰仕願之趣無余儀様子ニ相聞申候間、願之通被仰付  
被下候様於私も奉願候、此段肩書を以申上候、以上<sup>⑩</sup>

古閑忠右衛門<sup>⑩</sup>殿<sup>⑩</sup>

中村庄右衛門<sup>⑩</sup>殿<sup>⑩</sup>

御郡方

御奉行衆中

乍恐奉願口上之覚

私共丁内人数二而同懸六間町二居為中海老屋惣次郎儀、先年不屈之儀有  
之、弘化二巳年七月御刑法被 仰付、熊本八代御城下御構被 仰付、本庄  
手永大江村人数二被差加置、於私共茂奉恐入候、然處惣次郎儀其後謹慎仕  
後悔改心仕候様子ニ而、最早当年迄二十ヶ余於村方茂唯々一統之憐愍を受  
居申候迄之仕合ニ而、当方親類縁者共今追々帰參之儀歎願仕候儀ニ御座候  
得共、重御刑法被 仰付候者之儀ニ付奉恐入差扣罷在申候儀ニ御座候處、  
右之者当丑年六十一歳ニ罷成、余命少者ニ御座候間、其身茂今一度本所之  
人数ニ立返申度、左茂無御座候而者死期之心懸共罷成可申与内実相歎申候

右者不屈之儀有之、先年入墨答た、き之御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候由二付、此節に八入墨被除下候、此段可有御達候、以上

八月九日

御刑法方

御奉行中

小山造酒喜殿

三宅五郎左衛門殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀等有之候而者難相濟事二付、弥以相慎候様可有御達候、以上

御刑法方  
御奉行衆中

〔付紙〕

「本行見聞仕候處、書面之趣相違無御座、諸事相慎居申候、御用皮為買入遠方罷出候砌、御印シ有之候而ハ差障候儀も有之、旁入墨拔方御免被仰付被下度、此段乍憚付紙を以申上候

九月

外田貞八印

覚

中山手永巢林村  
穢多

次郎兵衛

長平

□ 乍恐奉願覚

巢林村穢多

次郎兵衛

長平

中山手永巢林村穢多右之者共儀、去ル嘉永六丑年老牛馬買入二付不埒之儀有之、翌寅年於下河原御刑法且額二入墨被仰付置候二付而者何れ茂後悔至極奉恐入相慎居申候、其後者謹慎仕老牛馬買入等二携不申、万端正路二相心得、村方も一和二交り、家内睦敷手業等専相稼申候、惣体巢林穢多村二御割付二相成居候御用滑皮之儀茂相納来候二付而ハ、荒皮為買入遠方所々二懸罷出候節、御法之御印有之候二付而ハ於向方取組、且往来止宿等内輪不謂心痛御座候由、最早拾三ヶ年以來心得方宜敷相慎居候者共二御座候間、恐多程奉願儀二御座候得共、何卒右之者共式人入墨拔方御免被仰付被下候様奉願候、願之通御免被仰付被下候ハ、外々取拟之一端二茂相成可申奉存候間、重疊宜敷被為成御達可被下候、此段乍恐覚書を以奉願候、以上

右者先年不屈之儀有之、御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候哉、當時之様子如何程二可有之哉之旨二付承繕申候處、其後先非を悔深謹慎いたし居、万端心得方宜敷村方一和二相交り家内睦敷相暮、手業等相稼居候由相体産物方御用滑革類引請出精相勤候付而ハ、追々荒皮買入方等遠方二懸所々分買求候由二而、專御用弁二相成候由、右之通二而最早十ヶ年余深相慎居候由唱承申候、以上

工藤覚兵衛

〔付札〕

僉議 平川

本紙中山手永巢林村穢多次郎兵衛・長平儀、老牛馬を殺し皮を剥候付、額入墨百答之刑被 仰付置候處、其後相慎居候付、除墨願出之趣書面之通二付御郡御目附御横目聞方被仰付候處、慎方相違も無之万端心得方宜様子二相聞、御答後最早十二ヶ年二相成申候間入墨被除下、向後弥以相慎居候様例之趣を以達可申哉

有 米 小 吉 笠 鎌田 柏木 道家 佐久間 御目附

例

中山手永巢林村  
穢多

入江次郎太郎14殿印

福嶋太郎右衛門13殿印

巢林村庄屋  
村山小左衛門印

慶応元年八月

以農業出精いたし候様可有御達候、以上

□ 口上之覚

御加子今井傳之助家族  
五三郎

右者先年御加子之節不届之儀有之候二付、安政三年辰八月御刑法被 仰付、御印入方被 仰付、父今井岩平家族江被 仰付置候処、父兄之教訓ニ基キ其身ニおゐて者屹卜相慎前罪を悔、改心仕孝心を尽申居候処、其後父母共病死仕、当時兄今井傳之助と同居仕居申候、右父母病死二付而ハ五三郎儀存生之内不孝を懸候儀深ク相悔、弥以本心ニ引改、追孝慕參之儀も無怠、且外出等之儀ニ至迄重畳相慎居申候処、右御刑法被仰付二而今当年迄十ヶ年ニ相成少も申分無御座候、最早年齢も四十五歳ニ罷成、弥以本心ニ立返申候二付而者、追々之御見合を以何卒御印拔方被 仰付被下候様奉願候、左候得ハ、弥以顧我身を御国恩難有奉存候、益心を嗜可申奉存候間、此段宜敷被成御達可被下候、以上

慶応元年七月

水橋玄熊伍列  
御船頭中

野間道助殿  
宮村喜市殿  
小山造酒喜<sup>11</sup>殿  
三宅五郎左衛門<sup>12</sup>殿

覚

右者先年不届之儀有之、御刑法被

仰付置候處、其儀相慎当時愈御謹慎仕行状宜様子御座候、右見聞之趣御達

御加子今井傳之助家族  
五三郎

仕候、以上

七月廿二日

御刑法方  
御奉行衆中

御加子今井傳之助家族  
五三郎

右者先年不届之儀有之、御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候哉、当時之様子委書付を以御達仕候様御達之趣達承智承繕申候処、安政三年八月御咎被 仰付候後謹慎仕、当時之行状慎方宜様子相聞申候、此段見聞之趣御達仕候、以上

七月廿二日

御刑法方  
根取衆中

安政三年八月八日川尻御加子五三郎 前刑扣略

川尻定詰  
御勝手方附所也

御横目中

〔付札〕

僉議

平川駿太

本紙五三郎儀、前刑別紙書拔之通安政三年八月御給扶持被差放ぬ字入墨四十笞之刑被 仰付置候處、其後相慎居候付、入墨被除下候様願之趣書面之通ニ御座候、川尻御作事所御目附同所定詰御勝手方附所之御横目聞方被仰付候處、五三郎儀慎方相違無之様子ニ而、御咎後最早七年ニ相成申候間、追々之見合を以入墨被除下向後慎方之趣共例之通及達可申候哉

代 米  
有 小  
笠 吉  
平 三  
井 上  
柏 木  
道 家  
佐 久 間  
御 目 附

川尻御加子今井  
傳之助

五三郎

仰付置候處、其後ハ弥奉恐入前非を悔相慎居、安政五年依願商札被渡置候ニ付而者塩物杯商売いたし候処、順路ニ有之聊以前之素振無之、村方交等も宜由ニ而、最早当年迄十五ヶ年程不相替深相慎候由承申候、以上

丑閏五月

下田右平

乍恐奉願覚

松山手永小曾部村

万五郎

〔朱筆〕

〔本紙万五郎慎心之様子村方之者差寄急度及見聞申候處、書面之趣相違無御座、弥以改心仕、専村方之為合ニ相成居候様子ニ相聞申候間、書面之通被仰付被下度奉存候、此段付紙にて申上候、以上

五月

斎藤弥五兵衛

右者弘化二年八月、背御法度博奕いたし村人数之身分ニ而猥ニ致商イ候内ニハ保太窪地筒松本嘉太郎所持之俵物借受、弟善七請持地方引当、右証文ニ村庄屋等之印形を似せ用イ、筑後若津町惣次郎并御領天草之者尾池卯市と申もの商筋取組候ニ付而者、往来手形不願受筑後若津江罷越、松本嘉太郎所持之眞を惣次郎列之もの江買取遣候を、自身借受之姿ニいたし、惣次郎列之もの出方いたし候眞代者已前之借財ニ払込候との取組いたし候処ハ嘉太郎儀約束之眞不相渡、惣次郎列之者役所江訴出御難題とも引発候次第、彼是不届者ニ付、入墨管百た、き御刑法被仰付、以来屹卜相慎候様松山会所江御呼出御教諭被仰付置候処、猶又嘉永三年五月葉種誣合札不願受、木倉手永牛ヶ瀬村弥平と申者分サフランを買取売払候次第不埒之至ニ付、三貫文之贖刑被仰付、其節茂右同様松山会所江御呼出、以来屹卜相心得候様御教諭被仰付置候、然処其後前悲奉悔、当年迄十五ヶ年相慎居申候、右万五郎儀安政五年依願在中商札志枚被渡下御願を以無患取続、近年者村方色々世話筋厚ク心配いたし、逸稜為合ニ相成申候間、乍恐右入墨被除下候様於私共も重疊宜敷奉願候、左候得者向後弥以改心仕、往々御

百性ニ成立可申と奉存候間、御別段之被為持御參談宜敷被仰付可被下候、此段乍恐万五郎五人組之者共覚書を以奉願候、以上

元治二年五月

小曾部村万五郎五人組

卯八（筆軸印）

同 平八（筆軸印）

同 喜七（筆軸印）

同村御用請候者

利平治印

同村庄屋後見

竹島文三郎印

小山七郎太殿印

〔付札〕

入江次郎太郎殿印

御刑法方

御奉行衆中

僉議 水津

此小曾部村万五郎儀、御刑法被 仰付候後、廿一年追而猶御咎被

仰付候而今十五年ニ相成、産業心懸相慎候由達并御横目聞方之通ニ

付追々之見合を以入墨可除下哉

松山手永小曾部村

万五郎

右者不届之儀有之、先年入墨管た、き之御刑法被

仰付置候處、其後相慎居候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以

上

御刑法方

御奉行中

六月十二日

入江次郎太郎殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而ハ難相濟事ニ付、弥

心得兼而難法仕候得者、高地茂所持不仕候二付、重モ二鍛冶炭焼等之山稼出精仕、農繫之御者作付雇二罷出渡世取統居申候、尤兄茂左衛門儀も極難洪者二而當時奉公二罷出、女房儀者幼年之一子を連日雇稼等を以取統居、惣十儀者老母を引請相育居申候處、平常事方茂宜敷格別謹慎仕居申候間、乍恐入墨被除下候様奉願候、如願被仰付被下候ハ、御仁慈之程奉感戴弥以謹慎可仕候間、此段可然様被成御達可被下候、為其覚書を以申上候、以上

元治二年四月

衛藤七弥太<sup>6</sup>殿<sup>印</sup>

村上久太郎<sup>7</sup>殿<sup>印</sup>

御刑法方

御奉行衆中

覚

深川手永長野村

惣十

歳四十二程

右者先年不届之儀有之、御刑法被

仰付置候処、其後相慎候哉之旨二付承繕申候処、安政四年御刑法被 仰付

高麗門定小屋江被差置、万延元年三月本所江被差返、兄茂右衛門と同居い

たし居候処、其後老母を引請右家を隔切、無高者二而鍛冶屋炭焼之山稼二

而渡世いたし、惣体以前者石工職いたし居候處、道具も所持不仕候付相止

居候処、当春之比今者右道具も村内分貸遣候由二而石細工専ら二付取統

居、追々庄屋村役人分も教諭を加付謹慎いたし、当時者煩敷唱も無之由承

申候、以上

丑閏五月

郡監付也

宗村弥久馬

僉議 平川

〔付札〕

有 米 小 吉 笠 平 三 井上 柏木 道家 佐久間 御目附

此<sup>〔付札〕</sup>総十儀、盗再犯二付別紙書拔之通御刑法被 仰付置候通二而、其後相慎居候間、入墨被除下候様願之趣書面之通二付、御郡御目附御横目聞方被 仰付候處、慎方相違無之、当時専ら石細工相稼候由二而、御答後最早六ヶ年二相成、追而之見合を以入墨被除下候儀、弥以相慎候様可被及御達哉

安政四年四月六日

前刑扣略

惣十

深川手永長野村

惣十

右者不届之儀有之、先年御入墨答た、き眉無之御刑法被 仰付置候処、其後相慎候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

六月五日

御刑法方

御奉行中

熊谷市郎左衛門<sup>8</sup>殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事二付、弥

以産業出精いたし候様可有御達候、以上

□ 覚

松山手水小曾部村

無高者

万五郎

歳五十三程

右者先年不届之儀有之、御刑法

被 仰付置候処、其後相慎当時之様子如何程二有之候哉之旨二付承繕申候

處、同人儀不届之儀有之、去ル弘化二年八月入墨答百た、き之御刑法被

仰付置、猶又嘉永三年五月不埒之儀有之三貫文之贖刑被

無御座改心仕、御百姓一遍二出精仕候間、入墨被拔下候様奉願候、此段與書を以申上候、已上

丑二月

内山又助<sup>4</sup>殿  
井口呈助<sup>5</sup>殿<sup>印</sup>

北里傳兵衛<sup>印</sup>

御刑法方

御奉行衆中

本紙滿願寺村淺吉所業之様子精々見聞仕候處、御懲戒被 仰付候後、弥以農事一遍に打懸出精仕候趣二而改心之様子書面之通相違無御座候間、願之如く御印被拔下候様有御座度奉存候、右見聞之趣付紙を以申上候、以上

丑二月

小国御郡代衆中

松崎文兵衛

覚

北里手永滿願寺村

淺吉

歳三十三程

右者先年不届之儀有之、御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候哉、当時之様子共承繕申候處、去ル安政四年比御刑法被 仰付候由之處、其後深改心いたし御教諭之趣廻役筋之差図茂堅相守、老母江事方よろしく家内睦敷村中之交り茂宜、以前者日稼体之暮いたし居候由之處、御咎後ハ農業一偏ニ身を委、村方ニ而者指折之精農ニ而此四五ヶ年者時々之粮物等積貯居、先中段位之御百姓ニ成立候由ニ而、諸上納等も並々越エ速ニ上納いたし、御咎後当年迄九ヶ年屹度相慎居候由唱承申候、以上

丑閏五月

工藤覚兵衛

倉岡運作

僉議 岡松

〔付札〕

本紙北里手永滿願寺村淺吉儀、前刑別紙書拔之通ニ而、安政四年十月ぬ之字入墨五十答之刑被 仰付置候處、其後相慎居候ニ付、入墨被除下候様願之趣書面之通ニ付、御郡御目附付御横目聞方被 仰付候處、淺吉儀御咎後深改心いたし、役筋之教諭を相守、老母江事方宜、且以前者日稼体之ものニ御座候處、農業ニ基キ当時中段位之百姓ニ成立候趣委細別紙之通相達申候、此もの儀御咎後九ヶ年ニ相成慎方茂前文之通ニ而別紙例依除墨可被差免哉

小米 吉平 有平 井上 柏木 道家 佐久間 御目附

北里手永滿願寺村

淺吉

右者不届之儀有之、先年入墨答た、き之御刑法被

仰付置候處、其後相慎居候付、此節右入墨被除下候、此段可有御達候、以上

上

閏五月廿四日

御刑法方

御奉行中

小国

御郡代衆中

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事ニ付、弥以農業出精いたし候様可有御達候、以上

□ 覚

一 男老人 歳四十二

平井嘉右衛門  
深川手永長野村

惣十

右之者不届之儀有之、去ル安政四年四月六日額ニ入墨答百た、き之

御刑法被 仰付、高麗門定小屋江被為差置候處、御年限相濟万延元年三月

廿三日日本所江被差返、兄茂左衛門江被引渡、是夕五年を過委敷書付を以御

達申上候様被仰付置候、依之同人家内ニ差加置申候處、其後謹慎第一ニ相

〔付札〕

米 小平 吉 郡 片山 柏木 道家 木村 御目附

儀慎方相違無之様子二而、御咎後最早十ヶ年二相成申候間、追々之見合を以入墨被除下、向後慎方之儀も例之通可被及御達哉

前刑

安政三年八月 川尻御加子武内

覚

川尻御加子渡邊陽之助弟

武内

右者先年不屈之儀有之、御刑法

被 仰付置候處、其後相慎居候哉、當時之様子委書付を以御達仕候様、御

達之趣奉承智承繕申候處、安政三年八月御咎

被 仰付候後弥以相慎、當時之行状慎方宜様子二相聞申候、此段見聞之趣

御達仕候、以上

二月廿五日

水谷三郎平

御刑法方

御奉行衆中

川尻御加子

渡邊陽之助弟

武内

右者先年不屈之儀有之、御刑法

被 仰付置候處、其後相慎居候哉、當時之様子共委書付を以御達仕候様御

達之趣奉承智承繕申候處、安政三年八月御咎被

仰付候後謹慎仕、當時之行状慎方宜様子二相聞申候、此段見聞之趣御達仕

候、以上

二月廿四日

川尻定詰

御勝手方附所也

御横目中

御刑法方

根取衆中

川尻御加子

渡邊陽之助弟

右者不屈之儀有之、先年入墨咎た、き之刑被 仰付置候處、其後相慎居候由二付、此節入墨被除下被候、此段可有御達候、以上

三月十七日

御刑法方

御奉行中

川尻船頭也

小山造酒喜殿

三宅五郎左衛門殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事二付、弥

以相慎候様可有御達候、以上

乍恐奉願覚

北里手永満願寺村

淺吉

当丑三十三才

右之者儀、菊池源兵衛於御山内御仕立之川苔盜取候内二者同類をも相誘盜

二罷越候次第不屈者二付、ぬ之字入墨五十た、き之御刑法被仰付、安政四

巳十月元々之通被引渡、屹度心底相改候様親類者勿論所役人分茂心を附、

御教諭之趣堅ク相守屹度改心致候ハ、是今五ヶ年を過委敷書附を以御達申

上候様被仰付置候處、去ル万延二酉年迄二五ヶ年二相成申候、然処淺吉儀

被返下候後少高受持御百性出精相働キ、御教諭之趣堅ク相守、家内睦間敷

ク諸事熟和二有之、諸出銀等其時々速二相納万端改心仕申候間、乍恐御入

墨被拔下候様奉願候、此段覚書を以申上候、以上

元治二年二月

満願寺村庄屋

泰七

北里傳兵衛<sup>3</sup>殿

右之通願出申候間、手永横目差出委敷見聞仕せ候處、庄屋泰七願之通相違

小  
郡 平 吉 有 米  
片 山 三  
柏 木  
道 家  
木 村  
御 目 附

〔付札〕

御目付衆中

後藤弾助

本紙龜助儀、甚兵衛方出京之供いたし候時分者勤 王之説を相唱、間  
ニ心易もの抔江者相勸候事も為有之由之処、いつれも不用意之由ニ  
而、其後者格別慚もいたし不申、当時ニ至り有之後悔いたし居候状之  
由、承申候段、演舌

僉議分司平川駿太執筆

本紙外様足輕石原又勝育之叔父龜助儀、前刑別紙之通ニ而入墨答百三  
年眉無之刑被 仰付、万延元年年限相濟被差返置候処、其後格別相慎  
候付、入墨を除被下候様願出之通ニ付、御横目方及達候處、格別相慎  
候趣本紙之通ニ候事、徒刑御免已後最早五ヶ年迄申處、龜助同様之罪  
状ニ而一同御咎被 仰付候もの去春已来追々除墨御免ニ相成候見合も  
有之候間、龜助儀も此節刺墨被除下已後慎方之儀例之通及達可申哉

前刑

生駒九左衛門組外様足輕

安政四年二月五日 佐藤龜助

長谷川勝次郎組外様足輕石原又勝育之叔父龜助儀、不屈之儀有之、先年入  
墨答た、き眉無之御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候由ニ付、此節右入  
墨被除下候、此段可有御達候、以上

二月廿七日

御刑法方

御奉行中

奥田章左衛門殿

尚々本文之通被 仰付候上、猶又心得違之儀有之候而者難相濟事候付、弥  
以相慎候様可有御座候、以上

□ 口上之覚

御加子渡辺陽之助弟

武内

右者先年御加子之節不屈之儀有之、安政三年辰八月御刑法被仰付御印入方  
被仰付、父渡辺平左衛門家族ニ被仰付置候處、父兄之教訓ニ基キ其身ニ於  
て茂相慎ミ、前罪を悔改心仕り孝心ヲ尽し申居候處、其後父平左衛門義病  
死仕り、当時兄渡辺陽之助と同居仕り居申候、右父病死仕り候ニ付而者武  
内儀存生之内不幸を懸候儀深く相悔、弥以本心引改、追孝慕參之儀茂無  
怠、且兄嫂江之事方少し茂無余念、外出等之儀ニ至迄重畳相慎居申候處、  
右御刑法被仰付候而今当年迄十ヶ年ニ相成少し茂申分無御座候、最早年齢  
も四十七歳ニ罷成、弥以善心ニ立返り前非を悔慨嘆仕候ニ付、何卒追々之  
御見合茂可有御座候間、御印拔方被 仰付被下候様奉願候、左候ハ、弥以  
我身を顧ミ御国恩難有奉存尽善心を生し可申候ニ付、此段宜敷被成御達可  
被下候、以上

元治二年二月

伍列御船頭

東彦四郎

安武貞記

野間直助殿  
宮村喜市殿  
野間和次郎

小山造酒喜<sup>1</sup>殿

三宅五郎左衛門<sup>2</sup>殿

僉議 平川

本紙武内儀、前刑別紙書拔之通安政三年八月御給扶持被差放ぬノ字  
入墨四十答之刑被 仰付置候處、其後相慎居候付、入墨被除下候様  
願之趣書面之通ニ御座候間、川尻御作事所御目附并同所定詰御勝手  
方附所々御横目見聞之趣被相達候様及達候之處、別紙之通ニ而武内

□ 口上之覚

外様足輕石原又勝  
育之叔父

龜助

右者幼年之砌重御咎被

仰付、宿元江被差返候以後、謹慎罷在居申候付、奉願苗字大小差免一季二召抱、家政向等内外世話いたし候様申付置候處、万端手全二相勤、逸稜為合二も相成、且又老母数年病氣二罷成居申候處、手厚看病仕孝養筋深、心を用、透々二者文武をも心懸、弥以先非を悔、謹慎罷在申候、然處右龜助一列被勤謹慎之訳二御印拔方被 仰付候ものも御座候由承知仕居申候間、外之御見合を以何卒御印拔御免被 仰付被下候様奉願候、此段可然様御達可被下候、以上

十一月

住江甚兵衛

覚

外様足輕石原又勝  
育之叔父

龜助

歳二十七日程

右者先年不届之儀有之、御刑法被 仰付置候處、其後相慎居候哉、当時之様子共如何程二有之候哉之旨に付承繕申候處、龜助儀者佐藤源太郎と為申者之養子二而、外様足輕被召拘置候處、先年不届之儀有之、苗字大小御取揚入墨百管三年届無之御刑法被 仰付、右年限相濟万延元年正月頃被差返候由之處、源太郎儀者龜助徒刑小屋江被差置候内病死いたし、実兄石原駒太も同様二付、同人養子石原又勝育二罷成、前非を悔相慎居候由、然二又勝家内者養祖母老人に而候得とも、病災不幸打続難立行處より家居壳払、養祖母者縁家之もの江預、又勝者実家より相勤候由二而、龜助儀兄者寄方共無之候處、又勝養祖母者龜助実母二而暫同居いたし居候へとも、何も手

(一)

稼等も無之心痛いたし居候由、尤同人儀筆算書見を茂心懸、氣働も相応二有之候付、世話人有之住江甚兵衛方江在付、同人方文久元年七月頃被奉願苗字大小差免、老人扶持二相応之給錢を遣し、一季二召抱物書被申付候付、石原龜助と相改、武芸之儀者弱柄二而十分二者出来兼候得とも、好之由二而出精いたし候由、然處甚兵衛方同二年以来両度程出京被 仰付候處、龜助儀每供いたし詰中諸用向等能弁候由二而、逸廉為合二為相成由、甚兵衛嫡子住江久彦方者歳十位二被相成、未夕時習館江茂出方無之由二而、龜助儀素読杯いたし遣、外二譜代之者も兩人様居候得共、格別書算等出来兼候由二而、龜助儀内外二懸精勤いたし候付、甚兵衛方より同年十二月頃賞美として紋服猶老人扶持給錢をも被増遣、家政之儀万端世話いたし候様被申付候處、弥以差入精勤いたし候由二而、往々者譜代二被致候内存二而被居候坎之由、扱又前文実母者最早及六旬兼而病身二有之候二付而者、龜助儀勤之透を見立有折安否を尋、又勝儀者小身之者に而十分之育も出来兼候付、龜助給米等之内を分遣成丈実母二者不自由無之様心を用候由、右之通に而、龜助儀先年御刑法被 仰付候儀當時とも相慎居候由唱承申候、以上

丑二月日

山口純太郎

松原彦弥太

岩佐儀藤次

山田五次兵衛

城素兵衛

上垣七作

河崎嘉右衛門

大塚権三郎

小原権内

松尾形助

## 史料紹介 『除墨帳』（二）

長屋 佳歩  
安高 啓明

本稿は、『西南学院大学博物館研究紀要』第八号に載録した『除墨帳』（二）の続編である。本史料の性格や構成については、前編を参考にしていただきたいが、前編と本編に加え、小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料』（創文社、一九九六年）に所収される「除墨帳（抄録）」を以て熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料『除墨帳』が全編翻刻となる。

幕府が享保の改革で導入した入墨刑は、熊本藩では中国律に倣い「刺墨」として創設された。これにあわせて熊本藩では、模範的な刺墨囚に対して「除墨」という制度を設けており、社会復帰を促す施策を行なっている。この制度は全国的にも稀有なものであり、罪人への警戒指導を主とした徒刑を先駆けて導入した藩ゆえの刑政観といえよう。除墨は赦免という一種の救済措置であり、刑法の施行細則は各藩の独自裁量に幕府から委ねられていたために創出された刑罰制度と位置付けることができる。

熊本藩の徒刑は、幕府の人足寄場や諸藩の徒刑・徒罪に影響を与えたと言われている。手に職をつけさせ、警戒指導を行なうとともに刑期満了後には一時金を支給する。いわば更生を促す刑罰制度を熊本藩が導入していたのは、本史料で取り上げている除墨にも相通じる刑政観である。公儀により前科を抹消されたことを公に示す除墨制度は、更生を前提にしているとはいえず、近世法制上では画期と評価できる。

本史料を通じて、熊本藩の特異性はもとより、幕藩体制下における司法制度のあり方を知ることができるであろう。幕府は法令により大枠を示しながら、藩の司法制度には介入しなかったために藩独自の刑罰体系が構築された。そこで、幕府と藩との司法制度の共通点や相違点についても、熊本藩政文書『除墨帳』からその一端を示していければと考えている。

## 【凡例】

- 一 判読し易さを考慮し、先に翻刻された『熊本藩法制史料集』の形式を参考に、各案件の冒頭には□印を付した。
- 一 人名と地名を除き、原則として旧字は常用漢字に改めたが、熊本藩特有の文字である「扌」や、「宛」を意味して用いられた「完」の表記は原文通り表記した。また、「処」・「處」の表記についても原文通りに表記した。
- 一 変体仮名は平仮名に改め、助詞として用いられた場合の「而」、「者」、「江」、「与」、「茂」については原文通り表記した。
- 一 罫字は一字分の空白に統一し、平出は原文通り改行した。
- 一 翻刻文を読み易くするため、読点・中黒を施した。
- 一 判読不能の文字は□で表示し、ルビにて「判読不能」、または「○〇カ」と補った。また、見せ消しの箇所には「」の記号を該当文の左部に付した。
- 一 原文における誤字や脱字は、ルビにて「ママ」と注記した。
- 一 貼紙や朱書の箇所にはそれぞれ「貼紙」「朱書」と補い、範囲が分かるよう「」で示した。奉行等の決裁を示す付札については、「付札」と補った上で、なるべく原史料に近づけるために囲って示している。
- 一 惣庄屋や郡代など比定できる人物については脚注で示している。